

貧しい家からの往診依頼にも 気軽に応じた心やさしい「赤ひげ先生」

青雲の志を 医学生の道に

江戸の終わり、途方もない貧乏のどん底に生きる人々に、できる限りの医療をつくした、人間味豊かな医師を描いた山本周五郎の大作「赤ひげ診療譚」がある。

この主役の赤ひげ先生を地でいくような医者が成田にもいた。
町医の川辺音治郎である。
川辺音治郎、旧姓大木音治郎は、明治15年(一八八二)10月10日、郷部村一八四番地に、父勤右工門、母いつの間次男として生まれた。

大木家は、郷部で田、畑、山林を合わせて三町歩くらいの農家であった。しかし、不幸なことに、父勤右工門は突然病気のために他界してしまっただけでなく、兄勤十郎12歳、音治郎7歳のときである。



川辺音治郎(かわべ おとじろう)

明治15年郷部に生まれる。7歳のとき父を病気で亡くしたことから医師を志し、佐倉順天堂病院で助手を務めながら修行を積む。大正10年、幸町で「川辺医院」を開業。貧しい患者にも心やさしく接し、町民から慕われた。

やがて、音治郎は明治27年3月、成田尋常小学校を優秀な成績で卒業した。卒業後、直ちに英漢義塾に入学するが、家庭の事情により、中途退学をする。その失意の中に青雲の志を医学生の道に選んだ。

佐倉の順天堂病院で 勉強に励む

当時、西の長崎、東の佐倉が医学のメッカと言われたなかで、佐倉順天堂医学塾に入り、全国の俊秀と共に勉強

に励んだ。

特に、医学の泰斗、佐藤舜海、恒二親子の薫陶を受け、前期試験合格と共に東都に上った。

医師への道は済生学舎(日医大の前身)を経て私立日本医学校に学び、優秀な成績で大正4年12月28日、医師の資格を取得した。

この間、日露戦争の最中の明治37年、東京の陸軍省第一司令団司令部の雇員から判任官となり、その後、東京予備病院戸山分院から佐倉分院付けとなり、その業績により明治39年4月勲七等瑞

宝章を授与されている。

また、大正3年10月15日、音治郎は当時佐倉町助役をしていた土族川辺清妻けいと養子縁組の届をしている。

大正5年(一九一六)11月、音治郎は、東京府南葛飾郡亀戸町大字松代町で「順天堂川辺医院」を開業。盛業の中に大正10年(一九二一)、音治郎は成田に帰り、成田町幸町で開業した。

大正12年9月、関東大震災があり、被災した人々が地方に避難したとき、暴徒として虐殺された事件に対し、人間の生命の尊厳さを説きながら痛嘆していたという。

また、昭和の不況の時代、待合室には、土地の患者にまさって朝鮮の人々ときにより自系ロシア人、またハンセン病の患者などが音治郎の下を訪れて治療を受け、薬をもらって無料の喜びを感じ謝して帰る姿もあった。人目を忍んで来るこつした患者のため、患者が帰るとそとと玄関や道路に消毒液の入った



町議会議員当選のころ(昭和8年)

水をまいていつも待ち受けている心かけを示していた。
昭和3年11月、音治郎は、保健衛生のために貢献するところ顯著なりとして、萬朝報社の名譽社友に推されてい



明治26年、佐倉順天堂病院の全景（日本博覧図より）

医療組合の創設に積極的協力

昭和5年2月、音治郎は、町の医療改革のために隔離病舎診療に関する意見書を渡辺由松、鈴木藤吉ら3人の開業医の名で成田町役場へ提出している。その要旨は、隔離病舎の担当を特定の医師から、町内全医師が診療に当たれるよう公平な行政で患者の安全に努めるべきであるということであった。

一方で音治郎は、東勝寺貫首の三好照葉、鈴木千万人らと共に、医療費の払えない貧しい人々のために公津村医療組合（国民健康保険制度の創設のモデルといわれた）に医師としての立場から積極的に協力した。

その背景には、音治郎が師と仰いだ長沼の本多玄俊医師、またその師の大原幽学の先祖株組合をたたえ、困難者のための豊住診療所に共鳴し共に活動したことによるものがあった。

貧しい家からの依頼にも、気軽に応じ、老婆一人暮らしの家に毎夜のように次男敏に提灯を持たせ往診することもあった。

患者の病状が、貧しさからの栄養不足と思われるとき「おい、おい、物を食べなさいよ」と枕の下にお金を差し入れた。薬袋の中にお金を入れてい

く医師であった。

音治郎は、昭和8年4月、成田町議会議員選挙に幸町有志、成田町有志、医師会有志の推薦を受け当選、以後二期町議を務めている。

昭和8年11月15日付けの東洋日日新聞には「奇特な医師、神の如き人格者、川辺医師」として次のような一文が紹介されている。

「川辺音治郎先生の神の如きに尊崇すべき人格は、医師としても町議会議員としても成田の持つ最大の誇りである。金を揃えなければ投棄しない今日の医師会に、川辺先生の奇特な行為こそ見逃出来ない。先生は誰彼の差別なく貧家ときたら夜でも昼でも往診を断ることはなく、常に「曰く、金持ちは立派な医者に任せ、無い人は俺の処に來いの主義で終始一貫、貧家に行けば車銭も自分持ちとは出入りの車夫の涙の告白である。町民感謝の的となりつつあり。」

このほか、昭和14年8月には中郷村村医として4年余りの無料診療の貢献に対し、吉岡七郎兵衛村長から感謝状が贈られている。

往診の途中

交通事故で重傷を負う

こうして音治郎が、町医として好評

を得ていた矢先、昭和12年8月3日午後8時ごろ、往診の途中、法華塚地先で自動車と音治郎の乗ったタクシィとが衝突し、重傷を負う悲運に見舞われた。

昭和14年5月には、東京芝の慈恵病院に入院、治療に当たった。

しかし、病状は悪化の一途をたどり同年9月10日、多くの町民の愛惜のうちに57歳で逝去した。

音治郎の楽しみといえば、俳号を五橋と称し在京の松根東洋城、長谷川零余子、小泉荘外、宮田成子ら著名な俳人との交流、また句会に出て雪の夜や南無起こされな念じねむ葉桜に愁人閑を守りきりなどの句をつくることであった。

音治郎の没後、『悼』の句会があり、幾春秋仁術をもて逝かれけり 戊子雁帰る大き仁徳五橋の忌 芳仙らが寄せられている。

川辺音治郎の長男秀一は、秀才であったが、病弱で早く世を去り、次男敏が二代目赤ひげ先生として往診に力を注ぎ、三男が薬業を営み、四男は医師として開業している。また孫たちは、6人が医師や歯科医師として活躍している。

音治郎の『赤ひげ先生』の心は子孫に引き継がれているようにある。（文中敬称略）